

# わんりい

167号  
2011/10/1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’  
東京都町田市能ヶ谷7-32-12 田井方  
〒195-0053 TEL&FAX:042-734-5100  
<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>  
Eメール: [wanli@jcom.home.ne.jp](mailto:wanli@jcom.home.ne.jp)  
◆‘わんりい’事務局の住所表記が上記になりました。



トウモロコシの実をほぐすギャロンチベット族の婦人(2010年12月) 撮影:大川健三(四姑娘山自然保護区管理局特別顧問)

## ‘わんりい’ 167号の主な目次

|                        |    |
|------------------------|----|
| 北京雑感(58)北京の郵便局Ⅱ        | 2  |
| 中華成語故事「抜苗助長」           | 3  |
| 媛媛讲故事(37)怪異シリーズ⑥「牡丹燈記」 | 4  |
| 松本杏花さんの俳句集・千里同風より      | 7  |
| 読む(80)「プリンセス・トヨトミ」     | 7  |
| 福建見聞録(10)日本語を学ぶ学生たち    | 8  |
| 私の四川省一人旅(49)理塘～康定へ     | 9  |
| アフリカとの出会い(56)「みんなのマイト」 | 12 |
| 作ってみよう!美味しい北京包子        | 13 |
| スリランカ紹介(51)スリランカのお酒4   | 14 |
| 町田市市民提案事業の開催決定について     | 15 |
| 中国・城市(都市)めぐり(9)北京市Ⅱ    | 16 |
| ‘わんりい’活動報告             | 18 |
| フェイジョアアードについて          | 18 |
| ‘わんりい’掲示板              | 20 |

【表紙写真説明】丹巴<sup>注</sup>では秋に収穫して平屋根で干されたトウモロコシを昔は人が食べていました。しかし小麦を食べるようになった現在ではトウモロコシの殆どが冬の間の家畜の餌になります。写真の後方には真っ赤な唐辛子が見えますが、これは人が食べるものです。当地では舌がひりひりする程に唐辛子がたくさん入った料理が好まれます。

■丹巴:四川省甘孜州<sup>ガッセ</sup>東部/海拔・1800メートル/ギャロン・チベット族居住地。

‘わんりい’6月号・9月号の表紙で大川健三氏が紹介くださったように他では見られない美しい建造物が点在し、『中国国家地理』という雑誌で、「中国十大美しい村」のトップに選ばれている。深い峡谷が続く変化に富んだ自然環境の中にあり、美人の多さと風景の美しさから美人谷の別名もある。



郵便局には、手紙やハガキを出すばかりでなく、荷物の発送でもお世話になりました。

一番初めに北京に2年近く滞在して引き上げる時、身の回りの品を海路郵送しようと思い、荷物を纏めました。入れる箱は郵便局で買わなくてはなりません。日本の郵便局でも箱や袋を売っていますが、適当なものが無いとき買うだけで、原則的には自前の箱や袋でOKですよね。ところが中国では、必ず郵便局で箱を買って詰めなければいけないと言われ、箱を買って来ました。大きさは3,4種類ありましたが、値段は1元から3元ほどで余差がありませんでした。当時は随分高いと思いましたが、厚手のダンボールで組み立てるととても頑丈な箱になりました。これなら港湾の荷扱いで投げられても、中身はともかく箱は安全だろうと思えるものでした。

重量は10kgまでと言われていたので、家で重さを量りながらきちんと詰めて郵便局に持込みました。日本へ海運で送りたいと言うと、郵便や為替のカウンターより低い小包用のカウンターの上で、荷物を開けられました。あれよあれよと言う間に中身を全部出して、包んであるものは「これは何か」と聞いたりしながら一通り全部調べていました。不振なものが無いと分ると荷物を箱に戻し始めましたが、何も考えないで片端から詰めていくので見ていて気が気ではありません。あんな詰め方では全部詰められないと心配してみると、案の定2,3のものが残ってしまいました。それを力任せに押し込もうとするので、我慢できず「私にやらせてください」と申し出て、改めてその場で詰め直しました。

きちんと詰め終わると、蓋を粘着テープでとめて、備えである梱包の機械で黄色くて硬いビニールのテープをかけて出荷の準備が出来ました。梱包代は0.6元だったと思います。その後郵便のカウンターであて先を確認し送料を払って手続き完了です。

これに懲りて、2回目からは、家で仮に詰めてみて重量を確認すると、品物はリュックに詰めて箱は組み立てないで持って行き、郵便局で品物を見て貰ってからその場で箱に詰めるようにしました。これで随分手間が省け、品物も乱暴に扱われないで一石二鳥、いえ一石三鳥でした。と言うのは、箱に詰めた荷物は持ち難くて、郵便局まで運ぶのが大変でした。当時は自家用車が今ほど普及していないので自転車で運びましたが、郵便局に到着してから、箱を持って入り口までの石段を登るのが一苦勞でした。その点、荷物をリュックに入れて背負ってしまえば運ぶのが楽でした。

郵便局は荷物を送る時ばかりでなく、受け取る時にもご

厄介になります。と言っても、中国の郵便局は、小包が届いたとの通知をくれるだけで、3,4年前までは送られて来た小包を配達してくれませんでした。通知書を持って郵便局へ行き、自分で運んでこなければなりません。時々、到着荷物の抜き打ち検査もやっているようで、一度、日本で留学生生活が長かった友人が卒業して、身の回りの衣類を実家に郵便で送った時、たまたま検査対象になってしまい、荷物の内容説明と引き取りに西直門の郵便局へ来るようにと通知がありました。

いつも利用する最寄の郵便局は歩いて3～4分の紫竹橋にあるのですが、西直門にはバスに乗って出かけなければなりません。友人本人はまだ日本にいたので、家族が出向いて説明をすることになり、一緒について行ってみました。事情を説明するのに随分時間がかかりました。小包の中身は古着ばかりなのですが、後で聞くと、郵便局は内容物が販売するための荷物ではないかと疑ったのだそうです。よく説明して納得してもらい、受け取った荷物は自分たちでタクシーに載せて運んで来ました。

タクシー代が日本と比べて、桁違いに安かったので、費用は気になりませんでした。逆に、検査が無くて、何時も利用する郵便局で荷物が受け取れたらどうなただろうと考えてしまいました。タクシーを利用するには近すぎるし、自転車の荷台に載せても、年寄り二人ではきつと苦勞したことでしょう。中国郵便の不親切さに不満を感じたものでした。

それが、2,3年まえに友人から、郵便局が小包を家まで配達してくれるようになったと聞きました。同じ頃に、日本の宅配業者が中国で、個人向けの配送サービスを開始したとのニュースを聞きましたから、競争のために郵便局も配達サービスを始めたのでしょうか。実は、5,6年前にも日本の業者が配送を始めるという話を聞いたのですが、その時は個人向けではなくて、会社あての荷物だけでしたから、我々は恩恵にあずかることは出来ませんでした。

それが最近では、ネットで注文した本や品物が、代金引換で翌日には届くようになりました。コンサートのチケットも宅配してくれるそうで、日本より進んだサービスが生まれそうな勢いです。これが、6,7年まえまでは、お店のショーケースに並んだ品物をお客が見せて欲しいと頼むと、面倒くさそうに応じ、釣銭は投げて寄越していた同じ人々が営む事業かと驚くばかりです。

北京は、外見だけでなく、そこに住む人々の意識も確実に変化しました。社会体制の変化に応じて、中国人の別の面(本来持っているサービス精神)が現れたと見るべきかも知れませんね。

皆さんは、日本語の「助長」という言葉、どのように使いますか？ 広辞苑には、①物事の成長・発展のために外から力を加えること、②急速に成長させようと思って、強いて力を添えてかえってこれを害すること。とありますが、短絡的な私は、「読んで字の如し」とばかりに、もっぱら①の意味で、(子供の)「科学に対する興味を助長する」とか、「我儘<sup>わがまま</sup>を助長してはいけない」とか、事柄の良し悪しを考えずに使っていました。

ところが中国語の勉強を始めて、中国語の「助長」には良い意味が無いことを知り、目が点になりましたが、この故事成語を読んで、目から鱗が落ちた気持ちになりました。

この話は、儒家の經典となっている《孟子・公孫丑上》に出て来るお話です。昔、宋の国に一人の農夫がおりました。農作業に熱心に取り組んでいて、毎日自分の畑を見回っておりました。ある時、ふと畑の作物の生長が遅いような気がしました。次の日も、またその次の日も、気をつけて見るのですが、成長しているようには見えません。隣の畑の作物は心なしか自分の畑のより成長が速いように見えました。

作物の成長を早めるにはどうしたら良いものかと暫く考えていましたが、急に素晴らしい考えを思い付き、手にしていた農具を畑の脇に置いて畑に入って行きました。それから彼は、畑の苗を一本ずつ少し引っ張って丈を高くしてやりました。畑一面の苗を全部伸ばすのは大変でしたが、夕方までにどうにかやり終えて、充実感と疲労感をこもこも感じながら家路につきました。

家に帰り着くと、家族に、今日一日自分がした仕事を自慢気に話しました。それを聞いた彼の息子は驚いて、畑を見に行きましたが、その時には、苗はもう皆枯れてしまって畝に横たわっていました。

《孟子》は、この話で「世の中の事物には何事も、発展の規則があるので、その段取りを無視して迅速な成長を求めると、却って事態を損なう」と教えています。つまり「助長」とは「手を加えて、物事を損なう」が元来の意味だったのです。

ところで、このお話の主人公はどうして宋人なのでしょうね。山田耕筰の「待ちぼうけ」で有名な、「守株待兔 (shou zhu dai tu)」のお話も、主人公は宋人です。どうも昔の中国人は、宋人に対する偏見を持っていたように見えますがどんなものなのでしょうか？



イラスト：叶霖 (Ye Lin)

こう考えた時に、「宋襄之仁 (sòng xiāng zhī rén)」（宋襄の仁）という言葉思い出しました。春秋時代の宋の襄公が、楚との戦いの折、宋よりも兵力の大きな楚の陣形が整わないうちに攻撃を仕掛けようと言う家臣の進言を聴かず、相手方の準備が整ってから戦って破れてしまったと言う、史実とされる話です。この言葉、日本で出版された所謂「四字熟語」の辞典には必ず載っていて、「不必要な情け」・「身の程をわきまえぬ振る舞い」などあまり良い意味には解釈されていませんね。こんなことから、宋人に対する評価が定着したのかと勝手に考えました。

ところが、この言葉、中国で出版された子供向けの「成語故詞」には載っていませんで、少し上級の「中国歴史故事精選」という本に「宋襄公“仁義”之師」として載っていました。その論調は、「宋の襄公の行いは、君子の特質である“仁”の心を実践したものである」というもので、「愚かな行い」どころか「君子に相応しい行い」と評価しているのです。さすが儒教の教えが浸透している中国だ、と思いました。と同時に、日中のこの相違はどこから来るのだろうと考えさせられました。もしかしたら、日本も明治時代までは中国式に考えていたのではないのでしょうか。戦後になって、「競争相手を利するだけの“仁”は馬鹿げたもの」との解釈が出てきたのではないかと云うのが、正に「独断と偏見」による私の不敵な「解釈」です。

元代(1206～1368年)の末頃、正月の元宵節(十五日)では、毎年、明州(浙江省鄞県)では五日間にわたって灯籠祭を行っていました。その夜になると、町の老若男女は皆町に出かけて、祭を思う存分見物するのが習わしでした。

至正二十年(1360年)、鎮明嶺(浙江省寧波)の麓に喬という書生が住んでいました。喬書生は妻が亡くなったばかりでしたので祭の賑わいを楽しむ気持ちになれず、ただ自分の家の門に寄りかかって佇んでいました。十五夜の三更(午後11時～午前1時)も過ぎ、町には人の気配が少なくなってきました。とその時、召使らしい女の子が牡丹二つを飾った提灯で足元を照らすようにして前に歩き、後ろには、赤い袴の上に緑色の上着を纏った、歳頃17、8歳かと思われる楚々とした風情の娘が玄関の前を西の方角に向かってゆっくりと歩いて行きました。

月の光を受けた娘の顔は絶世の美さで、喬書生はすぐ魂を奪われて、知らず知らずにその女性に付いて歩き出していました。時には前に、時には後ろになりながら何十歩か歩いたところで、女性は突然振り向いてにっこりと笑って口を開きました。

「約束をしたわけではありませんのに、この美しい月の下で巡り会うなんて何かご縁があるのでしょうか」

喬書生は女性の言葉を聞くとすぐ女性の前へ出て丁寧に挨拶をしてから答えました。

「拙宅はすぐ近くにあるのです。よろしかったらお寄りになられませんか？」

その女性はその誘いを躊躇うことなく素直に受けて、自分の前を歩いていた召使を呼びました。

「金蓮、お誘い頂いたのですから一緒に行きましょう」

金蓮という女の子は少し先を行ってましたが女性の声で戻ってくると二人と一緒に元の道に戻りました。喬書生は女の手を取って家に戻ると、二人は色々話し合いました。

「お名前はなんとおっしゃるのですか？ どこに住んでいらっしゃるのですか？」

と喬書生は訊きました。

「私、姓は符、名は漱芳、字は麗卿というのです。父は奉化州(浙江省奉化) 検査補佐官でしたが、亡くなりました。今は家業も衰退してしまいました。親戚もおりませんし、兄弟もおりませんので、召使の金蓮と二人で湖の西にある貸屋に住んでおります」

と女は答えました。

二人は話すほどに親しさを増し、その女性と一緒にいる喬書生の歓びは、巫山<sup>1)</sup>、洛水<sup>2)</sup>の女神に巡り会うことにも勝る歓びに感じました。

話し込んでいる間に、時間は容赦なく過ぎてすっかり夜が更けました。

「今晚はもう遅いですから、ここで泊まってゆかれてはどうですか」

と喬書生が勧めますと、女性はそのまま泊まることになりました。女性の立ち居振る舞いは気品に溢れ、あでやかで艶めかしく、喬書生は欲情を抑えられなくなり二人は枕を交わしました。翌朝、女性は別れを告げ帰りましたが、夜になると、再びやって来て、二人は愛情の限りを尽くしました。そして女が夜訪ねて来て朝は帰るようになって半月ぐらいが過ぎました。

ところで、喬書生の隣に一人の老人が住んでいました。老人はなんとなく隣の様子がおかしいと感じ、夜壁に穴を開けて覗いてみますと、老人の目に映ったのはなんと、ほのかな灯の下で喬書生が鮮やかな衣装を纏った髑髏を抱いている姿でした。翌日、老人は喬書生に毎晩訪ねてくる女性が何者かと問い詰めましたが、喬書生はあれこれと言葉を濁して話そうとしません。老人は喬書生に告げました。

「君は今大変な禍に巻き込まれているのだ。いいか、よく聞きなさい。君は今陰界の妖怪と付き合っていることに気付かずに枕を共にしているのだ。君の体の精気が消耗し尽くしたら、まだこんなに若いというのに命を落として黄泉の客となるのだ。なんて悲しいことだ！」

喬書生は吃驚仰天して、とうとう全部を白状しました。

老人は、

「その女が湖の西に住んでいると言うのなら、自分で行ってみれば何か分かるかもしれない」

と提案しました。

喬書生は老人に言われた通り、すぐ湖の西に行って、長い堤の上や、橋の下を歩きつ戻りつその女性の住んでいる家を探しました。どうしても見つからずその辺りに住んでいる人たちにも訊ねましたが、誰もその女性の姿を見かけたことがないという答が戻ってきました。

夕暮れになって、疲れた喬書生は少し休みたいと思い、近くにあった湖心寺というお寺に入って行きました



た。お寺の中をぶらぶら歩いていますと西の廊下の突き当たりに、暗い部屋があり、中へ入って見ると、柩が置かれていました。さらに近寄ってみますと柩の上に白い張り紙あり、牡丹の模様の提灯が下げられてその下に、人形が一体立っています。

昔は、旅先で思いがけなく亡くなった時など、柩を一時お寺に預けることが良くありました。喬書生はこの柩はどういう人のものかと思いつきに寄って張り紙を読んでみますと、なんと張り紙には「故奉化府検査補佐官之女麗郷之柩」と書かれてありました。喬書生は驚いて、さらに目を凝らすと牡丹模様の提灯の下に置かれた紙人形の背中には「金蓮」と書いてあります。

喬書生は恐怖に打ちのめされ、寺から必死で逃げ出しました。そしてその晩、喬書生は隣の老人の家で泊まり恐ろしさにどうしてよいか分かりませんでした。老人は次のように勧めました。

「玄妙寺の魏法師は寺の故元祖王真人の弟子で、法師が書く、鬼を駆除する護符は天下一だそう。早く求めに行きなさい」

翌朝、夜が明けると迷わず喬書生は魏法師に面会に行きました。魏法師は喬書生の顔を見るや訊ねました。

「あなたには酷い妖気を感じる。一体どうしたのですか？」

喬書生は自分が遭遇していることを包み隠さず話しました。魏法師は喬書生が話すのを聞くと、朱筆で書いた二枚の護符を彼に手渡しながら言いました。

「この一枚は玄関に置く、一枚は寝床に置くとよい。今後湖心寺へは絶対行ってはいけない」

喬書生は家に戻ると、護符を魏法師に言われた場所に置きました。果たして、その女性は来なくなりました。

一ヶ月ほど経った或る日、喬書生は湖心寺の近くに住んでいる知人のところを訪ねました。久しぶりだったので知人に勧められるまま酒を飲みかわしているうちにすっかり酔ってしまいました。「湖心寺に近寄ってはいけない」と言った魏法師の忠告もすっかり忘れてしまった喬書生は、家への帰り道を湖心寺のある道を通りました。間もなく湖心寺の玄関というあたりに来たところで、突然金蓮がそこで立っているのが見えました。

金蓮は「喬書生はなんて薄情な人でしょう。お嬢さんはいつも待っていらっしゃるのに…」と言いながら、喬書生の手を無理矢理に引いて西廊の暗い部屋に入りました。なんと、麗郷という例の娘がそこに座っているではありませんか。

「私はあなた様と顔見知りではありませんでしたが、たまたま灯籠祭の帰り道であなた様に会い、あなた様の愛情を頂くようになりました。そして私は夜毎にあなた様のもとに通い、身も心もすべて捧げました。しかしながらあなた様はあの法師の話信じ、私を疑うようになられて私との縁を断ち切ろうとなされました。人の言うことをこんなにやすやすと信じてしまわれる情けないあなた様を私は深く恨みに思います。幸いにも今日再びお会いすることができましたからには、私はもう決してあなた様を放しません」

娘はそう言いながら、喬書生の手を取り柩の前に進みました。柩の蓋はひとりでに開き、喬書生は娘に抱かれたまま共に柩の中へ滑り込むと蓋は忽ち閉まってしまい、喬書生はそのまま柩の中で世を去りました。

ところで、隣に住む老人は喬書生がなかなか帰って来ないので、不思議に思い喬書生が行きそうなところをあちこち探し、最後に湖心寺の西の奥の暗い部屋に行きますと、柩の蓋の隙間に喬書生の服の裾が挟まれてあるのが見えました。老人が湖心寺の住職に頼み、柩を開けて貰いますと、柩の中に喬書生と件の女性が上下に重なって抱き合い共に息絶えていました。喬書生の方は息絶えてからの時間の経過を感じられる姿でしたが、不思議なことに娘は依然として綺麗な顔のまままるで生きているかのようでした。

「この娘さんは奉化州検査補佐官の娘で、十七歳で亡くなり、暫く柩をここで預かることにしたが、一家は北へ引っ越して消息が絶え、もう十二年になります。この娘さんがそのような悪さをしていたとは思ってもよいことです」。

湖心寺の住職はこのように述べ、二人の遺体を城の西門の外に埋葬しました。

その後、怖ろしいことがこのあたりで起こり始めました。

黒い雲に覆われた昼や、月のない闇夜、召使の女性が牡丹灯籠を下げて先を歩き、喬書生と娘が手を繋いで其の後を歩いているのを人々は折々に見かけるようになりました。そして更に怖ろしいことに、彼らの姿を目撃した人は、よほど功德を積んだ人でない限り、悪寒に震えて熱を出し、その後重い病に伏せるようになって命を失うというようなことが度重なりました。

人々は怖ろしく思い、玄妙寺へ行き魏法師に何とかしてほしいと訴えました。しかし魏法師は

「わしの護符は何も起こっていない時なら効果があるが、祟りが始まっている今になってはもうわしの護

符の力では及ぶまい。四明山の頂上に鉄冠道人という、悪鬼を払い妖怪を鎮める法術を持った道士が住んでいると聞いている。みなさんは四明山の鉄冠道人に話を聞いてもらうがよい」

と人々に勧めました。

そこで、人々は四明山へ向かいました。山道は極めて険しく、藤づるをよじ上り、谷を渡り、ようようにして頂上に辿り着きますと草庵があり、道士の姿をした人が机に寄りかかって座っていました。人々は道士を拝礼し、苦勞をしてここまで訪ねてきたわけを話しました。

鉄冠道人は話を聞くといいました。

「私は随分長く山の奥に隠棲はしているが特別の力など持ち合わせていない。明日の命も知れぬ普通の人間じゃ」と人々の訴えを固辞しました。しかし人々が

「わたしたちも鉄冠道士さまのことを存じ上げておりませんでした。玄妙寺の魏法師の勧めでお訪ねいたしました」

と答えますと、鉄冠道士は納得した様子で、

「わしはもう六十年も山を降りたことがない。玄妙観の魏法師は余計なことを言うてくれたものじゃ。面倒なことだが魏法師の勧めとあれば行かないわけにもゆくまい」

と応じてくれました。

鉄冠道士は、傍らで鶴の面倒を見ていた童子に声を掛け、人々と共に山を下り始めました。鉄冠道士の足は驚くほど軽くて早く、あっという間もなく西門の外に着きました。そこに大きな壇を作ると鉄冠道人は壇上に背筋を伸ばして座り、護符を書きそれを焼きました。

するとまもなく目前に、身の丈一丈あまり、黄色い頭巾を冠り、絹の上着を着、金の鎧を身に付け、彫刻の施した戈を持った沢山の武将たちが現れました。武将たちは壇の下で恭しく腰を屈めて命令が下されるのを待っているといった様子です。

鉄冠道人は話し始めました。

「近頃、この地に‘あやかし’が現れ世間を騒がせている。急いでその‘あやかし’を祓わなければならない」

間もなく、娘、喬書生、金蓮三人が首枷を掛けられた姿で壇の下に連れて来られました。三人は直ちに、武将たちに鞭で叩かれて、血まみれになりました。鉄冠道人はさらに厳しく責めた後、紙を与えて、それぞれ自分の罪状を書かせました。三人は次のような百文字ぐらいの供述文を書きました。

喬書生は

「私は妻を亡くして寂しさに耐えられず、玄関に一人

で立っていると、この娘が通りかかり、あまりの美しさに心奪われて色戒を犯してしまいました。‘あやかし’の判別も出来ずに惑わされてしまい、今は深く後悔しています」

麗郷という娘は

「私は若くて世を去り話し相手もなく、寂しさに耐えられず魂が身を離れました。月の夜に五百年の宿縁を持つと思われる方に巡り会い、一緒に時を過ごすことは深い喜びでした。しかしながら世間を騒がせることになった罪は逃れようもないことです」

金蓮は

「私は竹で体を作られ、絹の衣装を身に纏ってお嬢様のもとに置かれました。誰がいつ作ったのかも分かりませんが、金蓮という名前が与えられると魂も宿り、お嬢様の手伝いをしてきました。しかしそれが‘あやかし’の仕業になるとは思いませんでした」

三人が書いたものを読み上げると下役はそれらを纏めて鉄冠道士に呈上しました。鉄冠道士はそれを受け取ると大きな筆を取り、次の判決文を書きました。

「生きている時に善悪を悟れなかった喬書生は、早逝しても惜しくはない。符家の娘は死んでいるにも拘らず淫を貪るとは生きていた時也有徳の女性ではないと察す。金蓮は‘あやかし’を助けて世間を惑わして人の道を犯した。三人とも罪が深く許すことは叶うまい。人々の平安のため、即刻、牡丹灯籠は焼いて、三人は地獄へ連れて行こう」

判決が下されると、武将たちは泣きながら抵抗する三人を無理やり引き立てて行きました。

鉄冠道士は事件がすべて解決したと安心して山へ帰りました。

その翌日、人々は鉄冠道士に感謝の意を表したいと山に登りました。しかし、草庵はあるものの、鉄冠道士の姿はどこにもありませんでした。魏法師に訊ねたら分かるかと玄妙観へ行きましたが、魏法師はすでに聾啞者となってなにも話せなくなっていました。

(終り)

#### ●注釈

- 1) 巫山：戦国時代楚国の詩人である屈原の名作「神女賦」に出る山。
- 2) 洛水：三国時代の曹操の息子である曹植の名作「洛神賦」に出る川。

いずれも女神が住む名所と言われる。

## アオザイの越南の娘の笑みさやか

xiù qiú huā yān xiāng  
绣球花妍香kě ài yuè nán xiǎo gū niáng  
可爱越南小姑娘xiào róng zhàn qīng shuǎng  
笑容绽清爽

## 秋蝶と戯れにけり四面仏

dié piān piān wǔ  
蝶翩翩舞wéi rào shén qí sì miàn fó  
围绕神奇四面佛xiāng xì jí lè shū  
相戏极乐舒

赏析 如果把上一首俳句比喻为风景画，那么，这首俳句则是人物画，而且是近距离的面部特写。将姑娘比作花朵已经司空见惯，而本首诗作从姑娘的笑脸上感受到了清爽，既表现出小姑娘的纯真，又寓意秋天的清爽。巧用季语，一石二鸟，语言浅白而感情深挚，情景交融而自然流畅。

季语 秋蝶，秋。

赏析 本首和下一首均为作者在游览蚤柬埔寨时所作。四面佛是指佛像面部为四方形，四面皆为佛脸。秋蝶与佛像相戏，将静的佛像写活了。本来，秋蝶是令人怜惜的，因为她们行将就木。但是，她们却在有限的生命中，快乐地与佛像相戏，谱写出了壮丽的生命赞歌。

## 読む(80)

## プリンセス・トヨトミ

万城目学著  
文藝春秋社

これは、現代を舞台とした「大阪国」の物語(フィクション)である。

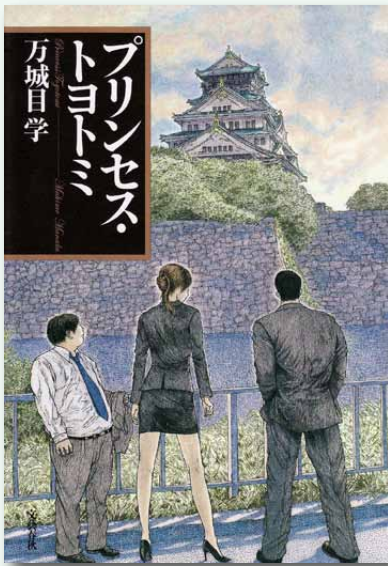
歴史に「もしも」はないけれども、「もし豊臣秀吉の末裔が現代まで生きていたとしたら」という大胆な仮定を土台にしたとき、壮大な光景を描く小説になる。詳細は、本書を読んでいただくとして(何をどう書いても「ネタばれ」になってしまう)、会計検査院の調査官3名の調査の先に突如「大阪国」が現れ、だからもちろん「大阪国総理大臣」が登場し、そして、極めつけには大阪が全停止し…と、かなり思い切ったストーリー展開なのだが、具体的な歴史背景と細かい市井の人々の描写が説得力を持ち、すんなり「大阪国」が入ってくる。

設定が無理なく入ってくるのは、フィクションのなかに、ある真実が含まれているから。「大阪国」ではないが、私たちは、なんとなく地域性を持って生活している。それは自身が30年住み慣れた土地を離れて、新しい場所で4年が経とうとしているからこそ感じるのかもしれないが、「その土地に生きている」という事実から受け取る「何か」が確実にあって、そして顔も名前も知らないけれど、同

じ地域で生活しているすべての人たちでその「何か」を共有している。

例えば、最近、近所に百貨店がオープンし、人の流れが変わった。その百貨店は、一度なくなったのだが、住民たちの強い要望でリニューアルオープンしたという噂があり、その噂どおり、オープンしたときに、街全体のウキウキ感がハンパでなかった。美容院でも、スポーツジムでも、喫茶店でも、いろんな世代の人たちが、百貨店についてのおしゃべりをしているのを幾度となく耳にした。私ももちろん、引っ越してきたばかりの頃から、工事中だった建物を見上げて、百貨店の完成を3年ほど心待ちにしていたこともあって、同じワクワク感をたくさんの知らない人たちで共有していたんだなあ、と実感してしまった。

「大阪国」に比べて、かなりスケールの小さい話になってしまった。「大阪国」は年間5億円の公費でメンテナンスされているから、かなりちゃんとしているのだけれども、やはり基本は地域の人たちが共有する思いとか意識だと思われて、だからなんとなく腑に落ちるのである。(真中智子)





私が1年間教えた福州外語外貿学院は総合大学と言うよりは単科大学で、語学(日本語と英語)を中心とする科と貿易・ビジネス英語・コンピューターを教える科の2学科からなる小規模の大学です。全体で5000人の学生がいます。5000人と言うと多いように感じますが、中国では一般に総合大学は2万、3万という学生数の大学が普通で、本校のような大学は小規模校と言えるでしょう。

日本語科の学生は各学年ともおよそ70人位で、2クラスに分かれています。私が教えたのは1年から3年までで、200人強の学生です。学生の質はピンからキリまで、いろいろです。熱心な学生はクラスの半分以上はいますが、真面目でない学生もクラスに4～5人はいます。この種の学生は毎日授業に出ています。教科書は開いていても別なことをしていたり、携帯電話をいじくっていたりして、授業には参加していません。何度も注意はしますが、全然変わりません。

当然このような学生は日本語を満足に話すことはできません。何か質問してもしどろもどろの状態です。あと残りの学生は真面目だけれどそんなに熱心ではないといったタイプの学生たちです。この範疇の学生が一番教えるのが難しいです。クラスは女子学生が7割を占めています。男子学生は全体におとなしすぎます。文系の学部や学科で見られる雰囲気は日本の大学と全く同じです。



体育祭にて 2009年11月3日



福州外語外貿学院の全景



鼓山へ日本語科の学生と 2009年11月24日

私は週に8コマ(後期は6コマ)担当しました。1コマ90分です。私の場合月曜日は授業がなく、火曜日から金曜日まででありました。1時間目は午前8時に始まり、6時間目は午後5時半に終わります。昼休みは2時間もあります。

火曜日：初級会話(1年生)1コマ  
 水曜日：中級会話(2年生)2コマ  
 木曜日：ビジネス日本語(3年生)2コマ(前期のみ)初級会話(1年生)1コマ  
 金曜日：日語作文(2年生)2コマ

授業を始めて驚いたのは、他の中国人先生方は授業が始まる数分前には教室に向き、チャイムが鳴ると同時に授業開始です。日本のように、チャイムが鳴ってから教室に行くというようなことはありません。私も常に時間前には教室に行くように努めました。

授業は教科書を中心に進めますが、時には日本映



画やテレビドラマを見せることもあります。また、今流行っている歌(と言っても私は最新流行歌など全く知りませんが)を紹介することもありました。しかし、中国人学生の方がよく知っています。毎日パソコンで、日本のドラマや歌をチェックし、常に最新情報をいろいろ得ているので、このような面では彼らの方が一段上ですね。アニメに関してはどの学生もよく知っています。「ちびまる子ちゃん」、「一休さん」(ちよつと古すぎますね)は言うに及ばず、ほとんどのアニメの中国語版を見ている。アニメを利用して授業を進めると、目を輝かして聞いてくれます。

学生との付き合いはそんなに頻繁というわけではありませんでした。しかし、何かにつけて寮に訪ねてくれたり、一緒に街へ買い物や遊びに出かけたり、料理を作ってくれたり、多くの学生と接する機会がありました。時には何人かの学生が寮に来て料理を作ってくれましたが、女子学生より男子学生の方が

料理は得意なのですね。家で一度も料理をやったことがないという女子学生ばかりでした。お礼に私の方も日本料理を作り、ごちそうしたことがあります。海苔巻や刺身、スパゲティ(日本料理とは言えませんが)を作りました。皆おいしそうに食べてくれて、大変うれしく思いました。

日本語科以外の学生との接触も多々ありました。彼らは日本語科の学生たちの友人であり、また学内で偶然出会ったり、アメリカ人教師が教えている学生だったり様々ですが、皆英語を話すことが出来ます。英語を話す学生が多いのには驚きました。中国人の先生方とも知り合う機会が持てたのも、皆英語が解るということからです。やはり中国では英語が一番学ぶ人が多いということが頷けますね。日本語の比ではありません。

今回は、もう少し学内の事について書いてみたいと思います(次号へ続く)。

## 私の四川省一人旅 [49]

## 理塘から康定へ

田井 元子

その日の早朝、理塘のバスターミナルで康定行きのバスに乗り込んだ。

3年前初めて母の友人らとグループ旅行で訪れた時から草原で暮らす遊牧民に魅せられ、いつか再びこの地に戻り、前回は個人行動の許されなかったこの土地の空気を、自由に存分に味わいたいと望んでいた願いが叶えられた今回の再訪は、たった4日間だったとは思えない程充実したものになったような気がしていた。理塘から立ち去る事は旅の終わりが間近に迫っている事を意味しており、それが私の気持ちを沈んだものにしてしたが、ここで出会った数々の強烈な滞在の記憶に満足し、ほぼ思い残す事なく旅立てる事への清々しさの様なものも感じられていた。

出発を待つバスの座席に腰掛けて窓から名残惜しい理塘の街へ別れを告げていると、突然ピューーウ!!と鋭い口笛の音が聞こえてきた。何? とそちらに目を向ければ、一緒に神山の岩山に登ったタクシーの運転手が自分の車にもたれてニヤニヤしながらこちらを見ている。相変わらず調子のいい男だ。

お客を送って康定まで行くと言っていた彼とは、まだ薄暗い早朝の鳥葬場で別れて以来だったが、いつの間に戻って来ていたのだろう。「後で払うから、先に

しといてくれよ」などと調子よく食事を奢らせ、ちゃっかり値切られたタクシー代の穴埋めしたりする奴だったが妙に憎めなかった。理塘で最初に出会った人間である彼と最後の最後に再び会えたのがちょっぴり嬉しく、私は彼に向かってワザとしかめっ面をして見せてから、笑って手を振った。理塘にはまたいつか絶対に戻ってきたい。その時に再び彼に会えたらいいのにな、という思いがチラッと心の中を通り過ぎた。

理塘を出発したバスは最初の峠に向かってグングンと高度を上げて行った。標高が4000メートルにもなる理塘は、それより更に標高の高い山に囲まれた盆地の中にある街なのだ。あっという間に眼下に小さくなっていく理塘の街へ最後の別れを告げれば、あとほどこまでも広がる大草原に覆われた山並みが続いていく。

草原といえば一般的には草地の広がる平原がイメージされるが、このあたり一帯の草原とは、標高の高さゆえ樹木の生えない高山を覆いつくしている壮大なスケールの草の絨毯だ。明るい太陽の光を草が反射して、遠目に見ればまるで芝生に覆われたように見える山並みが光り輝いているように見えた。そんな緑

の山肌の所々には放牧されているヤク達の群れが、双眼鏡で覗かなければそうとは判らないほどの黒い小さな点々となって見えている。

ほんの2週間前には、そんな景色を眺めて弾けそうな期待と喜びに胸を躍らせながらこの道を理塘に向かっていた私だったが、この時の気分はただ切なかった。景色が美しければ美しいだけ、自分はこの土地とは関りの無い下界の人間であり、たった今この美しい土地から立ち去ろうとしている事実が胸に突き刺さる。

風景に目をこらしていれば、時には全く人の気配を感じさせない大草原の中にポツンと立てられた遊牧民の黒いテントを見つけられる事もあった。この地平線まで続いている大草原すべてが彼らの土地であり彼らの庭なのだ。狭い土地でぎっしりとひしめきあって暮らしている都会の人間からは、信じられないスケールの生活だ。富士山よりも標高の高い厳しい自然条件の中、一切の文明生活から切り離された大草原の真ん中で、放牧をしながらテントで暮らす生活は生易しいものではないだろうが、彼らは先祖代々そうやって暮らしてきたのだ。

三年前に初めてこの地を訪れた旅の途中で、やはりこの道をバスに乗って走っている最中に、放牧生活の移動中と見られる遊牧民の家族がそれぞれ颯爽と馬にまたがり、すべての家財道具をヤクと馬の背に積んで、家畜の群れを追いながら移動しているところに出会ったことがある。土煙を上げながら走る黒いヤクの群れが隊列を乱さないよう見張り番の犬が走り回り、その脇をテンガロン・ハットをかぶり荒野のガンマンそのままの風貌の男や、長い髪をなびかせて颯爽と馬を駆るチベットの女性は、四川省の出身でこの土地にも深く関りをもっている烏里氏をして惚れ惚れとさせるほどに格好良かった。

近年では中国政府の政策や時代の流れにしたがって遊牧民の街への定住化が進み、草原のテントで遊牧生活を行っている者は激減しているそうだが、彼らの生活スタイルに時空を超えたロマンの様なものを感じている私には、それはとても寂しい事に思われた。しかし、ほんの数年前まで世界の深部として閉ざされていた環境にあり、独自の伝統的な生活スタイルを保ち続けていたこのチベット高原にも、近年の交通設備や情報網の飛躍的な発達により、ものすごいスピード

で下界の文明や情報が流れ込んできている事は、この旅の間中私にも如実に肌で感じられていた。

これまで草原のテントの中で自分たちだけの世界しか知らずに生きてきた彼らにとり、快適な住居での暮らしは決して否定されるべきものでは無いだろうし、今のような時代に即して生きていくためには、子供の教育や生活の面においても街への定住化は避けて通れないもので、ロマンや伝統などという話は部外者の感傷にすぎないのだろう。

そういえば2週間前の私がこの道を康定から理塘に向かって、チベット人ばかりの小さな乗り合いバスに乗り込んでいた時に、最前列に座ってまるでバスのリーダーのように乗客を仕切っていた男と理塘の街中で再会したのだった。上背が高くこの土地の男であるカムパ特有の鋭い顔立ちで、髪を伸ばしヒゲを蓄えた男は、一目でそれと判る遊牧民系の風貌だったが、バスの中で出会った時の彼は上下揃いのスーツを着ていたのだ。どうみても高級とは言い難い、皺のついてくたびれた背広とズボンを身に着けた彼の姿には、あのカムパ達の勇壮で精悍な趣はかけらほども感じられず、どこか侘しく滑稽ささえ感じられてしまったこの男に私は何ともいえない複雑な気分を抱いていた。

再会とはいっても相手は私の事など全く覚えていないので、正確には街の中で見かけたというのが正しい表現だが、遊牧民のアクセサリや衣装などを扱う店が軒を並べる街の目抜き通りの一角で、数人の仲間達と立ち話をしていた男は一際存在感があり、数日を経て出会っても私には一目で彼だと判った。ジーンズに黒いブーツを履き、ウエスタン風のシャツに革ジャンといった普段着姿の男は、あのくたびれたスーツを着込んでいた時のどこか滑稽で痛々しささえ感じられた彼とは打って変わって精悍でカッコ良く、私は思わず駆け寄って、そうよ！あなたはその方がずっと似合うわよ!! と声をかけたい衝動にかられてしまったものだ。

今やこの天空の世界にも怒濤のように入り込んでくる下界の生活習慣や文化に伴い、彼らの生活様式やスタイルが徐々に変貌をとげていくのは自然な事だ。だが、たとえ彼らの生活が変化しても、彼ら独自の文化と誇りは保ち続けていて欲しいと願いたい。どうか私が憧れてやまないカムパの男達の美意識は下界の世



界と同調などせず、いつまでも時代を超越したカッコいい荒野のカウボーイでいて欲しいと心から思う。

かつては大変な難路であったと聞く康定から理塘までの道のりも、道路事情が整えられた現在では特に問題もなく、思いの外早い時間に康定に到着できた。往路でも感じられた事だが、三年前の旅ではそれぞれ1日がかかりだった成都から康定、康定から理塘までの移動時間は大幅に短縮されている様子だ。

移動のバスを降りて最初にしなくてはならない恒例行事は、まず今夜の宿を決める事だった。私の様な貧乏旅行者にとり一番面倒なのがこの毎回の移動先での宿探しだが、その時の私にはまだもう一箇所この旅の当初から必ず立ち寄ろうと決めていた目的地があり、翌朝には再びバスでそちらに向かうつもりだったので、康定での宿泊は一泊だけだ。宿は始めから便利のいいバスターミナルの真向かいに建っているビルの中の招待所(中国における安宿)にすると決めていた。

その場所は前回の康定滞在の際、バスターミナルで客引きしていたお姉さんに誘われるまま付いて行って泊まったが、値段設備共に私には問題ないレベルだった事と、何と言ってもバスターミナルまで徒歩1分という好立地には満足していた。

今回は目指す場所が決まっていたので声をかけてくる客引き達には取りあわず、荷物を担いだ私は道路を渡ると向かい側のビルに向かった。コンクリートが打ちっぱなしのまま最後の仕上げがなされていないような、いかにも適当に立てられた感じの小さなビルの中には、それぞれ経営が別の招待所が何軒も詰まっています、前回の客引き姉御に連れて行かれた招待所もその中の一軒だ。おそらく何処に泊まっても似たり寄ったりなのだろうが、せっかくだから他も見てみたいと、私はあえて前回とは別の宿を物色し「香格里拉(シャングリラ)招待所」との看板を掲げた宿を名前だけで選ぶことにした。

今では「地上の楽園」「桃源郷」などの意味で高級ホテルの名前にも使われている「シャングリ・ラ」という言葉は、元タイギリスの作家であるジェームズ・ヒルトンによって執筆された小説「失われた地平線」の中に登場する架空の土地で、チベット奥地のどこかに存在する美しい理想郷の呼び名として、サンスクリット語を基にした著者による造語だそうだが、近年になり

雲南省西北部の中甸という街が、その小説のモデルとなった土地として名乗りをあげ、地名もシャングリラ(香格里拉)と変名してしまった。するとそれに対して、いや本当のモデルになった土地はこっちだと対抗し「最後の香格里拉」(最後のシャングリラ)を名乗りあげた土地こそが、私が心を奪われ愛してやまない稲城垂丁なのだ。

そんな名前の競い合いは多分に観光地として知名度を上げる為の戦略的な香りがするし(実際に中甸は地名を改称した事で一躍有名になり、世界中から観光客が押し寄せるようになったのだそうだ)、その場に住んでいる人間に使われているのはチベット語の地名である事から、私にはどうしても良い事のような気もしているが、とにかく私にとっての「シャングリラ」という地名は紛れもなく垂丁の方だ。

そんな思いを込めてドアを叩いた香格里拉招待所は、勿論、桃源郷のような素敵な宿ではなく、案の前泊まった宿と同程度の安宿で宿泊料金も同じだった。窓のある明るく快適な部屋は多少料金が高い為、ただ一晩眠る為だけに宿を取る私は、当然窓のない一番安い個室で30元だ。窓がなく狭いとはいえ部屋やベッドはそこそこ清潔だったし、シャワーが共同であるのは安宿慣れている私には普通の事だ。これまで泊まってきた宿の料金と比べれば部屋の設備に対して30元はやや割高な印象だが、それもバスターミナルまで徒歩1分の好立地を考えれば満足だった。

それに嬉しい事にはこの宿には洗濯機があり、フロントにいたお姉さんに頼むと無料で使わせてもらったので、これまで溜めていた洗濯物を一気に片付けられたのがありがたかった。日の出てるうちに洗濯を済ませ、ビルの屋上のような場所の片隅に洗濯物を干すと、私は既に勝手知ったる土地となっている康定の街に散歩に出かけた。

(続く)

#### 使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を!

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、使用済み古切手と書き損じの葉書を集めています。古切手は周りを1cmほど残して切り取り、おついで折に「わんりい」の事務局にお届けくださるか、田井にお渡し下さい。

Wakia maito?

Wakia wa?

主人はキクユ族。ケニアの中で、一番人口の多い最大部族だ。彼のふるさとで最初に覚えたのがキクユ語の挨拶。英語では“How are you?”、スワヒリ語では、“Habari gani?” (発音はハバリガニ)、いずれも「お元気ですか?」「元気です」という意味の基本的な挨拶の言葉だ。しかし、キクユ語は複雑だ。挨拶する相手によって挨拶の言葉が変わってくるのだ。

お母さんに挨拶するときは、キクユ語のお母さんを意味する maito (発音はマイト)、お父さんは、wa (発音はワ)。おじいさんは、showa gui (発音はショウグイ)、おばあさんは、cucu (ショウショウ) と呼び方も少しおもしろい。というように、相手が誰によって挨拶の言葉が違っているのだ。暫く滞在すると、すぐに口から出てくるようになるのだが、慣れないうちは本人を前にして頭が混乱し、なかなか出てこない。

私は、挨拶の言葉の豊富さからキクユ語やキクユの文化に興味をもった。キクユ族は、国境が決められる前から、ケニアが国として独立する前から、民族としての言葉を持ち、文化を持ち、歴史を持ってきている。

例えば名前の付け方もとてもユニークだ。キクユ族の夫婦は、子供の数の話になると、よく「最低4人は欲しい」と言う人が多い。その理由には訳がある。

子供の名前は一般的に、長男には夫側の父親の名前をつける。子供からすると、自分のおじいちゃんの名前を継ぐことになる。次男は、母親のお父さんの名前をつける。長女には、夫側のお母さんの名前をつけ、次女には妻側のお母さんの名前をつける。つまり子供達は自分の祖父母の名前を継ぐことになる。夫婦それぞれの、両親の名前をつけるために子供は最低4人欲しいというわけだ。

キクユ族は、先祖からのつながりをとても大切にしている。その理由の1つが、クランと呼ばれる、血族のつながりを持つ親族の集まりを意味する伝統集団があり、9つのクランがあるといわれている。そのいずれかにそれぞれの家族や個人は属している。キクユ族は、名前から、住んでいる地域から、その人がどのクランに属するかなどの推測が可能らしい。

クランは土地を所有し、男の子に土地を分割してきた。女の子は、結婚して家を出るのが普通なので、土地の相続はない。しかし、おもしろいことにキクユの



キクユ族のマイト達 (中央ケニア州ニエリ県にて)

撮影：竹田悦子



キクユ族のマイト達に囲まれて (中央が竹田悦子さん)

伝統宗教の神 (ガイ) は、9人の女の子を最初の人類に授けたとしている。しかし、それでは十分ではないと思った神はもう1人男の子を授けた。それが、キクユ族の男性の始まりとされている。

男の子の価値は、今でもとても大きい社会である。土地を世襲し、将来は、“elders” (エルダーズ) と呼ばれる地域のリーダーになっていく。このリーダーになるには、地域の人に、推薦され、承認される必要がある。世襲制ではなく、年齢でもなく、その人の人徳、人柄、知識などすべてが考慮され、まさに誰からも尊敬される人が選ばれるのである。

しかし女性は結婚し子供を産むと母、つまり Maito (マイト) と呼ばれるようになり、その地位はすごくあがる。地域の人々も尊敬を込めて彼女を Maito と呼ぶようになると、マイトは、自分の子供だけのマイトではなく地域すべての子供のマイトになるのだ。キクユ



族の農村を訪ねると、どの家でも、その家のお母さんが温かく迎えてくれる。その姿と振る舞いは、あたかも自分のお母さんではないかと感じることがある。もてなすというよりは、お世話をしてくれるという感じなのだ。

マイト達は家での仕事に誇りを持ち、その仕事もまた尊敬されている様子が見て取れる。そして地域のすべての子供達は、どこのお母さんも自分のお母さんだからどこにいても喜んで手伝いをするのだ。友達の家に遊びに行ったのに、友達のお母さんに、水汲み、家畜の世話、子供の世話をいろいろと言いつけられたりしていることもある。しかし、地域のすべての子供達は、地域にいるすべてのお母さん達を慕っている。「共食」という言葉がある。食べ物を共に食すという意味だが、「共食文化」が当たり前のキクユの地で

は、自分の子供や夫がどこでご飯を食べたのか把握しないお母さんもいる。何故なら、自分の家族がどこのお母さんの所で食べようと自分のお母さんという感覚があるからだと思う。

最近本土に上陸した台風15号。近所でも被害に遭われた方がいた。1人暮らしのかなり年配のおばさんの家の屋根のトタンが飛んでいってしまった。植木も倒されて、庭も大変な状態だ。おばさんが、もし今、キクユの村にいたらと想像してみた。

彼女が気付く前に、彼女のことをお母さんと思う子供達の手で、そのトタンは元に戻され、倒れた植木も片付いているだろう。

私のマイト、思い出だけで数百人。困ったことが起きたとき、心配なことがあるとき、必ず思い出してしまう。その存在が、とても懐かしい。

## 作ってみよう！ 北京風味の肉餡包子

急に肌寒く感じた或る日、長い間作っていなかった肉まんが急に食べたくなり、10年前、'わんりい'の料理講座で劉冠群さん(殷秋瑞夫人)に教えてもらったレシピを開きました。

日本の肉まんレシピとは異なる、目からウロコの肉餡の作り方に北京包子の美味しさの秘密があります。肉餡に使う肉は脂身の多い部位を細かく叩き切り、美味しさを加える生海老も細かく切って入れ、更にたっぷりサラダ油、ゴマ油を注ぎこみ、脂身の足りない肉ならラードも加え、皮は徹底的に捏ねて餡を包みます。蒸しあがった包子はこくがあってジューシーで不思議と油っこくありませんでした。'わんりい' HPの料理のお部屋からレシピを転載します。

### 【材料】(25個分)

薄力粉：700g、ドライイースト菌：6～10g、豚切落とし肉：350g位、むき海老：100g位、葱：1本、干椎茸：3枚、白菜：1/5個、筍：大1/4個、生姜：親指大、醤油：75～100cc)、サラダ油：100～125cc、ごま油：25cc、料理酒：25cc、味の素：小さじ1、砂糖：大匙1、塩：少々、花椒粉：小さじ1/2

◆サラダ油は豚肉の脂身の量によって加減する。

◆キクラゲ、筍など季節の材料を加えると一味違う。その時は白菜の量を加減する。

### 【作り方】

①干し椎茸をぬるま湯(200cc)につけて戻す。

②人肌のぬるま湯(200cc)にイースト菌と砂糖少々を入れ暫く置くと発酵が始まる。

③薄力粉にサラダ油50ccを入れてよく混ぜてから、発酵の始まったイースト菌を加え、更によく混ぜ合わせる。38℃位のぬるま湯(約200cc位)を2から3回に分けて加え、グルテンが出てくるまでよく捏ね(耳たぶよりやや固め)てから纏め、濡れ布巾を掛けて一時間ほど寝かせる。

④生姜、葱、戻し椎茸、豚肉、むき海老、筍、白菜を微塵に切る。

⑤白菜を除く材料に塩以外の調味料を加え、手でしっかり捏ねる。

⑥椎茸の戻し汁(約100cc)を少しずつ混ぜて行く。捏ねる方向を常に同じにする。最後に塩、少々を加える。

⑦包子の種を小分けにして更によく捏ねる。捏ね方が足りないとキメが荒い包子になる。

⑩小分けにした種を直径5cm位の棒状にまとめ、4cm幅位に切り分ける。(1個、約50g位)

⑪手のひらで押し、麺棒で直径12～3cm位の、周辺を薄く中心は厚めの円形にのばす。

⑫餡を包む直前に、みじん切り白菜をよく絞って混ぜる。

⑬大匙山1杯程度の肉餡を包み込む。閉じ口しっかり閉じる。

⑭蒸し器にゆとりを持たせて並べ、強火で15分蒸す。

◆包子を蒸す時、クッキングペーパーを利用すると、蒸し器につかない。

◆具が残ったら、残りの白菜と一緒にスープにする。

◆皮の材料が残ったら、花巻(渦巻き蒸しパン)にする。

今回はポヤデーと「お酒」の話をししましょう。

日本では陰暦で8月の満月の日を「中秋の名月」という風流な名称で呼び、古よりお団子<sup>いにしえ</sup>を供え、ススキを飾って、真ん丸のお月様を愛でてきました。しかし、スリランカでは毎月、満月の日をポヤデーと呼んでとても神聖な日と考え、祭日となっていますが、9月の月もビナラ月(シンハラ語の9月)のポヤデーと呼ぶだけで他月の満月の日と同じで特別な扱いはしません。

スリランカで一般的な国家行事や日常生活では太陽暦を使っていますが、宗教上の儀式では各民族によってシンハラ暦やタミール暦等に基づいて儀式を執り行う日時や開始時間が決められる事が多く、ポヤデーはシンハラ暦に基づいた行事です。労働や娯楽を慎む日とされ、官庁や学校、銀行、一般の会社の多くが休みになります。敬虔な仏教徒はお寺へ参拝しますので、各地の高名なお寺では終日祈りを捧げる仏教徒で大変な賑わいです。特にバク月(4月)のポヤデーはスリランカの正月と重なりますので最重要なスリランカの祭日です。

スリランカは祭日が多いと言われていています。ポヤデーだけでも年に12回もあり、シンハラ暦以外の民族独自の大きな儀式の日も祭日ですので、ますます祝日が増えます。もちろんクリスマスも祭日になっています。祭日はざっと数えて年間24日あります。1ヶ月の日数に近いですね、

さてポヤデーと「お酒」は密接な関係があります。それも、酒飲みにとっては非常に辛い関係の一日です。前述のようにポヤデーは労働や娯楽を慎まなくてははいけません。飲酒も慎む事に含まれ、なんと国中の酒屋がこの日は閉店になり、アルコール類が入手出来なくなります。飲食店でも一切のアルコール類の提供が禁止され、海外からの観光客が宿泊する一流ホテルでも例外ではありません。ヒルトンホテルのメインバーでも、プールサイドバーでも情けない事にソフトドリンクしか出てきません。

娯楽を慎む日ですが、多分スポーツは娯楽とは考えられていないのでしょう。祭日なのでテニス、ゴルフ他のスポーツに興じる外国人が多数います。しかし、この日ばかりはクラブハウスでもソフトドリンクしかありません。一般家庭での飲酒もご法度です。たぶん、こっそり密やかに飲んでいる人はいると思いますが、宗教警察の様な組織が飲酒現場を嗅ぎまわって摘発しているという話です。

中近東に赴任した同僚は、表向きは毎日が禁酒の日々ですから、これに比べれば月に一度位の禁酒日なんて大した

事はない」と言っていました。そこは酒飲みの楽しい習性で、般若湯を捜して走り回ります。

どこそこの中華料理店はヤカンにビールを移し替えて提供してくれると聞けば走り、どこぞのローカルホテルの喫茶室では一滴垂らすどころかお茶よりもウィスキーがほとんどの紅茶が飲めると聞けばまたまた走り、某店では施錠しカーテンを締め切って常連客だけにアルコールを出しているなど色々な話があります。場末の飲食店まで行けば、かなりの確率でお酒が飲めるようです。

日本へ帰任し何年か経って、スリランカに遊びに行った時の事です。レンタカーを借りて目的地を決めずに走り回り、夕方に着いた町で宿を探すという旅をしていました。

たまたまポヤデーだった日に日本で1回だけ夕食をともにしたスリランカ人の住む町に偶然に着きました。ポヤデーにあたるこの日の町は当然ながら閑散としていました。宿を決めてから、この町に誰か知り合いはいないかと手持ちの住所録を繰っていると彼の名前が出てきました。さっそく電話をしてみると、彼は不在だったので家族の方に名前と宿名を伝えておきました。

その後、夕食がてら町を散歩して宿に帰ってみると、部屋に置いた荷物がなくなっています。慌ててフロントに行くと、従業員が笑顔で何か言っています。〇〇さんの知り合いならば先に言ってくれないと困ると言っているようです。この町に住むその人は地元ではかなりの有力者のようで、自ら宿に乗り込んで来るや自分の客人は家に泊まってもらおうと言って、僕の部屋の鍵を強引に開けさせて荷物を彼の自宅に運んでしまったというではありませんか。

暫らくすると迎えの人が来て彼の自宅へ向いました。着いてみるとビックリで、スリランカの片田舎の家としては恐ろしく立派な家でした。家族全員が玄関から飛び出てきて大歓迎をうけました。ところが困った事に、相手は片言の英語しか話せない、僕はシンハラ語を片言も話せない、コミュニケーションの手段がありません。先ほども名前と宿名を伝えるのにも苦労しました。そこで彼がとった行動は、あまりにも単純で驚きました。地元の中学校の英語教師を叩き起こして連れて来て通訳をさせたのです。

既に時間は午後9時を過ぎていたのですが、食材がどこからか届き、近所の奥さん達の手も借りて宴会の準備開始です。毎度の事ですが、奥さん達は甲斐甲斐しく働き、旦那衆は何もせずにウロウロしています。

英語教師を通訳に日本に関する質問に答えていると、ポ



ヤデーにも係わらずお酒が出てきました。僕も、日本から持ってきたウイスキーと日本酒を提供して盛り上がっている内にお酒が無くなってしまいました。またまた驚いた事に、今度は酒屋を叩き起こしてお酒を買って来させました。

既に日付が変わったから大丈夫だと大真面目な顔で言うのですが、僕の時計ではまだまだ日付変更前で、真ん丸

のお月様も夜空で輝いています。時間のごまかし方がポヤデーらしくて面白いですね。僕もまだポヤデーの内だぞ、なんて野暮な事は言いません。一緒になって飲み続けている内に料理も並べられ、奥様方も一緒になって明け方まで文字どおりに飲めや歌えの大宴会が続きました。

この1件がポヤデーに係わる僕の一番の思い出です。

▶ 'わんりい' の皆様、ご協力を! 町田市市民提案事業の開催決定

## **つなげよう! ひろげよう! 地域の和と輪**

聞いてみよう! 鶴川地区に住む留学生たちのスピーチ!! 楽しもう! 中国の民族音楽!!

事業開催日: 12月18日(日) 於: 鶴川市民センター・ホール

時間その他の詳細は追ってお知らせします

町田市地域情報誌「まちびと」の2010年年末号で「わんりい」の活動が紹介されたことにより、今年春、町田市民部市民協働推進課から町田市民提案事業「つながりひろがる地域支援事業」申請のお誘いを受け、上記事業が市の助成事業として認可されました。その後、東日本大震災があり実施が延びて、12月18日(日)に開催が決定しました。

国土舘大学町田校舎(元鶴川校舎)に2002年21世紀学部が新設されて以来800人を超える留学生がこの町田校舎で学んでいます。

5、6年前、年に一度ですが「わんりい」のメンバーたちが国土舘の留学生たちの日本語授業の手伝いをしたことがあります。留学生たちが、何人かずつグループに分かれて地域の人々と時事問題について語り合い、その内容をレポートするという授業で、留学生と語り合うというところで「わんりい」が協力しました。

当時は、町田校舎で学ぶ留学生がこのように多数であるとは思っておりませんでした。留学生たちは大変達者に日本語を話し、先生から与えられた話題のテーマについてかなり突っ込んで真摯に語り合いました。どの留学生も真面目に学業に励んでおり、精神的にもたくましい若者たちで、参加したメンバーたちは一様に感銘を受けました。また、この授業の後、担当の講師からまとめて送って頂いた留学生たちのレポートはどれも問題をよく理解しており感心したものです。

留学生たちは学業と日本での留学費用を作るためのアルバイトで時間的余裕がないことがあり、地域の人々と交流する機会が作り出せないという実情があります。とはいえ、日本での留学体験の印象がどのようなものであったかは留学生一人一人の帰国後の対日感情にもかかわる大切なことと思います。私たちの

地域に住む全部の留学生たちと交流というのは難しいかもしれませんが、一人でも二人でもより多く地域と温かな血の通う交流を日本での留学の土産として帰って欲しいという気持ちは誰にもあると思います。

その様な思いから、留学生の皆さんとの交流のきっかけづくりとして、何人かの留学生たちに日本での生活の事や日本で生活をして感じている事、地域に望むことなどをスピーチして貰い、地元で生活する留学生たちの実像を地域の人々に知ってもらおう機会を作りたいという思いが評価され、町田市民提案事業「つながりひろがる地域支援事業」として表題の申請が認められたかと思えます。

事業内容の詳細は、まだ未定部分がありますが3部構成の事業として

1部: 山下孝之さんによるケーナ演奏

2部: 留学生5名のスピーチ

3部: 中国民族音楽演奏

を予定しています。尚、中国民族音楽演奏会では、会の活動にこれまでもご協力頂いてきた、銭騰浩氏(中国笙)、曹雪晶氏(二胡)、林敏さん(揚琴)の三名による演奏が決まりました。それぞれ中国国内及び日本内外で活躍しており、演奏力を高く評価されて日本各地での大きな記念式典などに招聘され演奏していらっしゃいます。上記事業の趣旨に賛同くださり今回もご協力頂けることになりました。

\*

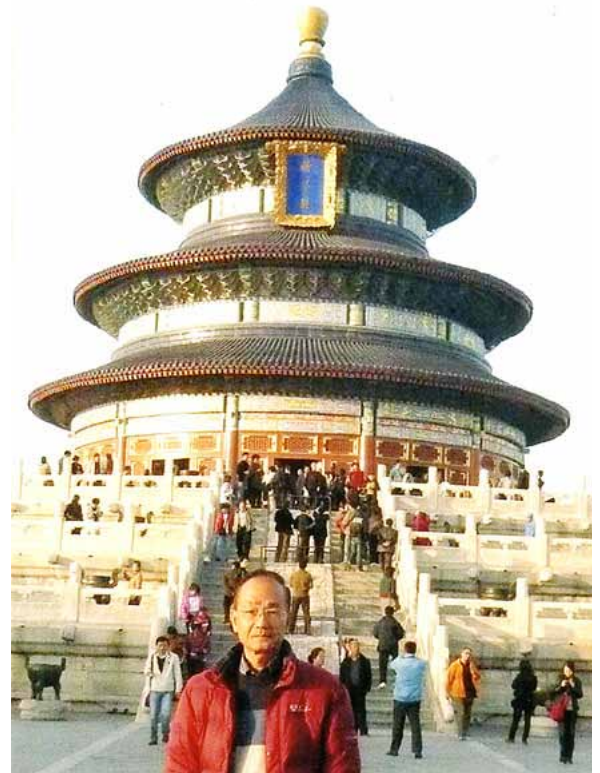
尚、この事業は鶴川地区3団地(2丁目団地・5丁目団地・6丁目団地)、国土舘大学国際交流ルーム、町田国際交流センター・協力部会の協力を得て実施されます。「わんりい」の皆様のご協力、よろしく願いします。(田井)

二回目の記述が長くなったが、三回目は2008年の11月にお客さんの接待でいっしょに2泊3日の北京旅行をした。

お客さんは北京は初めてなので、まず天安門広場から故宮→頤和園→圓明園→オリンピック施設とまわった。これらはすでに述べているので割愛するが、オリンピック施設は今回は間近で見ることができた。「鳥の巣」スタジアムは、中に入れなかったが、手前の人工池と一緒に撮った写真は私のお気に入りである。「水立方」は中に入ることができた。中はとても綺麗で、北島が百平と二百平で金メダルをとった50mプールと郭晶晶が華麗なる飛び込みで金メダルをとった跳び込み用プールを見ているとあのオリンピックを彷彿とさせてくれた。

さて北京観光といえば万里の長城と明十三陵も定番である。万里の長城は北京では八達嶺に行ってみるが、人工衛星からも見えるという長大な建造物なので2年間でここを含め4ヶ所で長城を見た。中でも嘉峪関の長城が一番強い印象を受けた。シルクロードの要路とはいえ周囲が砂漠以外何もないところにあれだけの城壁と長城を作ったことは、中国人の誇りであろう。「天下雄関」と刻まれた石碑を見たが、その字の通りである。ちなみに建築に必要であった膨大なレンガは、「百数十里の遠い所で焼かれたものを牛車で運んだ」と説明書にある。一里は今の一里とは違うであろうが、それにしても気の遠くなる工事であったと想像される。八達嶺は山の背につくりあげられたものであるが、嘉峪関といい、八達嶺といい、あれだけの規模の建造物を作るために、どれだけの人間が狩り出されたのかとの思いが過る。

明十三陵は、八達嶺長城と同じ方向なので帰りに立ち寄った。ここは明(1368～1644)の第3代の永楽帝から、あの最後の崇禎帝までの13人の皇帝とその皇后の陵墓群であることから十三陵という。そのうち見学できるのは定陵・長陵・昭陵の三陵墓だけである。中でも地下宮殿の定陵が有名で、宮殿は地下27mのところで作ってある。中に入っていくと柱や扉等に手の込んだ彫刻がほどこされており、これだけでも見る価値がある。皇帝の玉座なども展示されているが、あの世でも皇帝として君臨するつもりなのか。縊死した崇禎帝も最後はここに祀られてさぞかし満足しているであろう。



天壇公園内でもっとも有名な建造物・祈念殿。皇帝が正月に五穀豊穡を願い祈りを捧げた。屋根は瑠璃瓦葺きの三層になっている。

二日目はまず天壇公園に向った。この場所はよく知られているように皇帝が天に五穀豊穡を祈願するところであり、明の時代の1420年に造られた。頤和園と同じく1998年に世界遺産に登録されている。祈念殿が特に有名で三層の丸い屋根はデザインが素晴らしい。これを見たときちょうど午前中の太陽の光に瑠璃色の屋根が光り輝き、この世のものとは思えないほどの美しさであった。

午後は胡同(フートン)に行った。場所は紫禁城からすぐのところにある。ここはお客さんと二人で人力車にのって街並みを見学した。「胡同」と中日辞典で引くと「横丁、路地。元代にモンゴル語から入ったことば」とある。モンゴルは遊牧民族なので横丁があるわけではなく、「井戸」という意味から転化したという。元は約100年もの間、中国を席卷していたのだからモンゴル文化はいろいろ入ってきたはずである。馬頭琴もそうなのであろうが、詳しい方の解説を聞いてみたい。

「胡同」は横丁と訳されているが、日本の横丁のイメージとは異なる。細い路地が迷路のように広がっているが、建物は基本的に灰色に近いレンガ造りである。火事



にも強いだろうし、地震も殆どないので昔のままの風情が残っている。ガイドがある家と協定しているのか、中流家庭を見せてくれた。

入口はどこの家も狭いが、中に入ると中庭があり結構広い。いわゆる四合院造りと思える。その家主は馴れているらしく、くつろいだ雰囲気ガイドを通していろいろ説明してくれた。彼らの生活の一部が見られ、とても満足した。他の観光スポットも見物したが、三回目はこのあたりで止め、四回目の旅行に移ることにしたい。



四回目の北京行きは、中国人の友人と行った2009年5月下旬である。

天津を皮切りに避暑山荘と外八廟で有名な、歴代皇帝が避暑地とした承德を堪能したあと北京に一日だけ滞在した。友人とは二人ともまだ行ったことのない周口店に行くことにした。

周口店は言うまでもなく北京原人の頭蓋骨が発掘されこれも世界遺産になったが、市内から西南に約50kmもあり少し遠い。市内からバスに乗ったが、空調のついた立派なバスでとても快適であった。途中で下車して別のバスに乗りかえ2時間近くかかってようやく到着した。博物館の入口には、大きな頭部のレプリカが置かれていた。そのそばを通り長い坂を登り切ると、そこに博物館が現れた。発見されたのは、50万年前の原人の完全な頭蓋骨であったが、友人が「本物は実はここにはない。

実は第二次世界大戦時、日本軍が日本に密かに持ち帰った」と言った。私は当然ここで本物の北京原人が見られるのだと期待していたのだが、このことを知り大いにショックを受けた。これはどう解釈すればいいのかと考えた。友人に日本のどこにあるのかと聞くとそこまでは知らないと言う。盗んだのか、それとも学術的に極めて貴重なものを混乱から避けるために日本に持ち帰ったのか？

友人に「日本が盗んだのか」と聞くと「そうとまでは言えないが、その可能性もある」とはっきりしない。いずれにしても、もし日本のどこかにあるのであれば、中国にすぐ返還すべきである。案内板に発掘された場所が示してあったのでそこに行ってみた。そこには大きな洞窟があり、設けられた階段で下まで下りられるようになっていた。洞窟といっても真暗いトンネル状のものではなく、上からは日が射していた。ガイドブックを改めて見ると「日中戦争の混乱で紛失した」としか書いてない。



北京原人 周口店遺跡博物館入口に飾られている北京原人頭部の巨大なレプリカ

何となくスッキリしない気持のまま、またバスに乗り市内に向った。戻る途中、あの有名な盧溝橋を少し離れたところにかけてある橋から遠望した。ここも是非行きたかったが、時間がなく、そのうちにと思いつつ未だに見ていない。

以上が私の4回に亘る北京旅行の概要である。これだけ書いても、まだ北京のほんの一部分の記述に過ぎない。どうしても見てみたいところは、この盧溝橋、さらに宋慶齡故居・郭沫若故居・恭王府・紅葉の時期の香山公園などであるが、いつか必ずこの目でじっくり見てみたい。これまで書いてきた観光地も季節により、また知れば知るほど違う顔をみせてくれるであろう。従って何度でも見てみたい。やはり北京は奥が深い。

‘わんりい’へ入会を歓迎します

年会費：1500円 入会金なし

郵便局振替口座：0180-5-134011 ‘わんりい’

‘わんりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各地から日本にいらっしゃる方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等の開催など文化的交流を通して国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。また、2月と8月を除いて年10回、会報‘わんりい’を発行し、情報の交換に努めています。入会はいつでも歓迎しています。

活動の様子は、おたより又は‘わんりい’HPでご覧ください。

問合せ：☎042-734-5100（事務局）

Eメール: wanli@jcom.home.ne.jp

わんりい活動報告(2011年8月28日(土) 於: 町田市民フォーラム・調理室)

## ブラジルの家庭料理を作って味わおう!

講師: 藤沢レナード&グロリア・夫妻

‘わんりい’が、広く呼び掛けて開催の料理講座だけでも40回を超えていますが、初めて太平洋反対側に飛び、ブラジルの国民食を味わいました。どの国の料理も長い年月を越えてそれぞれに工夫を凝らし磨かれてきた味わいがあり毎回感動します。

黒インゲンを使った真っ黒なシチュウは、目下ブラジルの国民食として、ブラジルを訪ねた観光客たちにも大人気で、材料の黒インゲンの価格が高騰し、ブラジルの一般庶民の皆さんはなかなか食卓に載せられなくなったとか、そんな情報がネットに載るほどの名物料理と知ったのは、ご夫妻が正式の講座の前、事前講座として‘わんりい’のスタッフ達の為に作って下さったものを味わってからです。

なじみのない名前と材料にどれほどの方が参加されるかと心配していましたが、流石「知る人ぞ知る料理」の味を知っている皆さんが多く、募集予定15名~20名を超える応募となり、賑やかに和気藹藹とした楽しい料理講座になりました。今回の講座と、メインディッシュ・フェイジョアードについて、講師のグロリアさんが寄稿下さいました。下記に掲載します。

(田井記)

### フェイジョアードについて

藤沢レナート、グロリア

こんにちは、皆さま、この夏はお元気で過ごされましたか? 本当に暑かったですね。9月になって、夜に虫の声が聞こえて来るようになりました。嬉しさと悲しさを感じます。嬉しさは暑い日がなくなること、悲しさはこれから涼しくなった後、寒い日がきます。まあこれは先の話ですね。

さて、この夏は日中文化交流市民サークル‘わんりい’の為に我井さんからブラジル料理を作ってくださいという依頼があり、ブラジル料理を代表するフェイジョアードを日本の皆さんに紹介しました。

フェイジョアードはブラジル料理の代表の一つです。ブラジルにアフリカから連れてこられた黒人たちが、自分たちの主人が食べずに捨てた材料を使って生まれた料理といわれ、ブラジルでは一般的にこの説を信じていますが、グルメ研究者たちによると、ポルトガル人が好む煮込み料理から始まったという説もあるそうです。確かにポルトガルにはフェイジョアードに似ている料理があります。豆や肉の種類が異なり、フェイジョアードでは使わない野菜も使っていますが、確かに似ています。

でも奴隷の主人たちが食べないで捨てた材料は何? それは豚の耳や尻尾や鼻や足などなのです。それを聞いてだけでフェイジョアードは食べたくないという方

がいらっしゃるかもですね。材料の名前を聞いた田井さんは悩みました。材料の名前を聞いたら日本の皆さんはびっくりされるかもしれません。「豚の耳を使うブラジル料理を作りましょう」とパンフレットに書いてあったら誰が来るのでしょうか。

フェイジョアードの材料は、黒いインゲン、豚のいろいろな部位の塩漬け肉、スモークソーセージ、にんにく、塩、小ネギ、ロリエとオリーブオイルです。これらの材料を一緒に煮込んだフェイジョアードは真っ黒なカレー料理のようです。炒めた玉ねぎを炊き込んだご飯にかけて食べるのですが誰もが驚く程とても美味しい料理なのです。

8月の初め、‘わんりい’の皆さんと一緒に作って食べて貰いました。そして皆さんも全員「とても美味しい!」と喜んで下さいました。

本番のブラジル料理の講習会は8月の27日で、たくさんの方々が参加されました。全部で32人も参加されて私はびっくりしました。私のポルトガル語のクラスの生徒さんもいらっしゃいましたし、生徒さんの友人もいました。その生徒さんの友人は、また友達を連れてきましたし、ブラジル人もいました。

私は料理の作り方を田井さんの助けで説明し、説明の後、5グループに分かれて料理を作りました。それぞれのグループでは初めて会った人もいましたが、一人一人が最初から自分のする事が決まっていたようにスムーズに行われました。同じ材料でも作る人により味が変わります、各テーブルの味が出ていました、ど



れも美味しかったです。

フェイスジョアードにはご飯がつきます。日本では白いご飯のまま頂くのが普通ですが、ブラジルではフライパンにオリーブオイルを熱し、細かく刻んだ玉ねぎとにんにくをきつね色にいため塩を振ってご飯と一緒に炊き込みます。今回、私はこの炊き込みご飯にブラジル食品店で手に入れたにんにく入りの塩を使いました。にんにくが好きな

方にお勧めのとてもおいしい塩で私はその塩にマジック塩という名前をつけてまました。そして皆さんがご飯を炊くときに私は各テーブルを回って、マジック塩を使いました。

フェイスジョアードとご飯、そして付け合せにケールの炒め物とファロファ（キャッサバのトッピング）を作りました。その他、ブラジル風サラダはレタスにココナッツの木の芯とビーツを合わせました。ケールは日本では青汁用の野菜で栄養がとてもありますし、ビーツも鉄分が多い栄養価の高い野菜です。

食事の最後のデザートは、ブラジルのお菓子ベイジンニョとブリガデイロと田井さんが美味しくいれたブラジルコーヒーです。ベイジンニョとブリガデイロは子供のお誕生日パーティーにとっても人気のあるブラジルのお菓子です。ベイジンニョはそのまま翻訳すると「小さなキス」です。ココナッツファインとコンデンスミルクで作るので本当に甘いキスのようにとろけそうな味です。ブリガデイロはまたコンデンスミルクとココアで作ります。

料理会が始まる前に、田井さんが「フェイスジョアードは魔法のシチュウ」といいました。料理会が終わって考えてみると本当にそうかもしれません。皆さんが初めて作ったフェイスジョアードは魔法が掛かっているようにどれもとてもおいしかったのです。

皆様と美味しいフェイスジョアードを作って、本当に美味しい(笑)一日を過ごしました。皆様、ブラジル料理に関心をもってください本当にありがとうございました。これからも他のブラジル料理を是非試してください。



料理の説明をするグロリアさん 撮影：石井 孝



お皿に盛り付けて完成！ 色をお見せできないのが残念なフェイスジョアード 撮影：石井 孝

#### 〈若しも、キャッサバが手に入ったら〉

キャッサバはデンプンの多いイモだそう。タピオカの原料として良く知られているが、ブラジルでは昔からこの粉を用いた料理が庶民の食べ本として親しまれていたとフリー百科ウイキペディアに書かれている。

今回、フェイスジョアードの付け合せとして紹介されたファロファは、このキャッサバの粉を、玉ねぎ、にんにく、ベーコンのみじん切りと合わせ、オリーブオイルできつね色になるまで炒めたもので、一見、粉チーズのようだ。香ばしくてとても美味しい。

ブラジルでは肉料理の付け合せとしてよく食べることだが、講師の藤沢レナードさんが「ご飯にかけても美味しいですよ」とのこと、残ったキャッサバの粉を引き取り、家で早速ファロファ作った。これを、ゆでたてのスパゲッティにオリーブオイルをまぶし、生卵の黄身を落としてファロファをたっぷり掛けて食べた。スパゲッティ・カルボナーラ風でなかなかイケた。（田井）

\*「ブラジル料理の会」レシピは「わんりい」のHPに掲載しています。<http://wanli.web.infoseek.co.jp/>

全員集合!! 第14回 町田発国際ボランティア祭 2011 夢広場

～この星に平和と希望を～

10月30日(日) 10:00～16:00 於:まちの駅「ぽっぽ町田」イベント広場

国際支援と友好活動をしている町田市と町田市周辺のボランティア団体が集結! エスニック料理、民族芸能、エスニックグッズいっぱいのお縁日! 今年は「頑張ろう! 日本!!」の気持ちを込めて、被災地支援をしている難民の皆さんのお話や被災地の映像の上映を盛り込みました。

‘わんりい’の会は、例年通り炭火でジワリと焼いた香ばしい、遊牧民風味のエスニック焼鶏に加えて手作りの美味しい月餅を販売します。月餅は昨年の夢広場で初めて販売し、あっという間に売り切れてしまいました。ご都合つく皆さん、是非お出掛けしてご賞味ください。



- 主催: 2011 夢広場実行委員会
- 共催: (財)町田市文化・国際交流財団
- 問合せ: TEL 042-722-4260 町田国際交流センター

日中友好会館・第21回中国文化の日

「大草原からの響き2011—フルンボイル民族歌舞劇院公演とモンゴル族の暮らし展」

●展覧会: 『モンゴル族の暮らし展』

モンゴル族の衣装や楽器、生活用品、移動式住居ゲルなど、暮らしや文化などに関する展示。

於: 日中友好会館美術館 2011年9月30日(金)～10月23日(日) / 10:00～17:00  
(公演日は上演終了まで開館(水曜休館)(入場無料))

- \*関連イベント: 民族衣装を着てみよう(申込不要) 10月1日(土)、8日(土)、15日(土) / 13:00-13:30
- \*関連イベント: ホーミー ミニ講座(申込不要) 10月21日(金) 15:00～



▶公演: 「大草原からの響き2011—フルンボイル民族歌舞劇院公演」モンゴル族の歌や踊りと馬頭琴他

2011年10月21日(金)～23日(日) 於: 日中友好会館 地下1階 大ホール

10月21日(金) 19:00、22日(土)、13:30/18:30、10月23日(日): 13:30

開場30分前、全回、約60分

フルンボイル民族歌舞劇院 座席指定/前売り券1000円 \*詳細は問合せ下さい。



▶主催: (財)日中友好会館

▶後援: 中国駐日大使館、(社)日中友好協会 他

▶お問合せ: 財団法人日中友好会館文化事業部 ☎03-3815-5085 〒112-0004 東京都文京区後楽1-5-3

歌芝居『初恋のアリラン』

日本自分史学会・昭和の記録賞受賞作品『おばあちゃんの初恋物語』(著者: 中村登美枝/町田市在住)を舞台化

～戦火に咲いた一輪の恋そして孤児達と共に～

- 脚本/構成: 甘利真美
- 出演: 甘利真美、南保大樹(劇団東演)川上史子(ピアノ)
- 劇中歌: アリラン、満州娘、月の砂漠、浜千鳥、他
- 会場: 神奈川公会堂 / 年10月22日(土) / 開演13:30  
<http://www.city.yokohama.lg.jp/kanagawa/oshirase/shisetsu/equ12.html>  
かなっくホール / 10月31日(月) / 開演13:30  
<http://kanack-hall.jp/>
- 入場料: 3000円(当日 3500円)

▲主催: 海老名芸術プロジェクト

▲後援: 神奈川県、神奈川県教育委員会、海老名市、海老名市教育委員会、町田市

▲問合せ/申込み: 事務局 TEL/FAX 046-232-3194

～東日本大震災復興応援コンサート～

『第二のふるさとに心を寄せて』

- 出演: 賈鵬芳(二胡)、姜小青(古箏)、王明君(笛子・簫) ジャンティン(琵琶)、石磊(揚琴)
- 会場: HAKUJU HALL(東京都渋谷区富ヶ谷1-37-5)  
<http://www.hakujuhall.jp/>(東京メトロ千代田線「代々木公園」または小田急「代々木八幡」より徒歩5分)
- 2011年11月29日(火) 19:00開演
- 入場料(全席指定): 5000円(前売) / 5500円(当日)
- ▲問合せ: ラサ企画(☎090-2725-7381)  
<http://lasa-kikaku.cside.com/index.php?catid=9>

[10月の定例会と10月号の発送日]

- ◆定例会: 10月7日(金) 13:30～(田井宅)
- ◆11月号のおたより発送日: 11月1日(月) 13:30～